

牧師室から (2021.10.17)

メグが生後6ヶ月になった。乳歯が落ちて新しい歯が生えて来た。歯がどうも痒かったのか、あちこちの物を甘噛みする。先日はよりによって床の上の（置いていたのが悪いのだが）模範六法をかじり、その次は椅子の上の（これも置き場所が悪いのだが）ローズゲンを噛んだのである。人間からも神からも裁かれそうなものだが、犬には罪がないので、怒ることもできずにいるものだから、彼女は平然としている。「神聖なものを犬に与えてはならず・・・」（マタイ 7:6）

アイネが死んでからもおよそ6ヶ月経つが、以前ほどではないが、今でもしばしば想い出す。最近アイネとメグの性格の違いがあるのが、より分かるようになってきた。メグは私どもの新たな慰め、喜びになりつつあるが、それでもどこかまだ淋しい。

ヨブは初め多くの子どもや家畜に恵まれていたが、神様からの試みによってそれらを失ってしまう。しかし、最終的には子供も家畜も量的には回復されたことが分かる。ただこれをもって単純にハッピーエンドというのは、安直すぎる。「ヨブには元の数だけの息子と娘が与えられた。もちろん、ヨブの妻が産んだ子どもたちである。…彼女が新たに産んだ子らは家畜のように二倍にはならなかった。失われた家畜は他の家畜で埋め合わせが付く。しかし人はそれぞれ固有の存在であり、代替が効かない。失われた子供たちは帰らない。『終曲』は単なるハッピーエンドの物語ではない。」（並木浩一『ヨブ記注解』）

私共にとってもアイネやメグは、確かに動物であるが家畜ではなく、それぞれが固有の存在であり、代替が効かないのである。罪のないペットの死というのは、やはり切ないものである。「時の翼に乗って悲しみは飛び去る」（ラ・フォンテーヌ『寓話』）とはいうものの、やはりどこかに悲しみの染みは残るのかもしれない。

（鈴木淳一牧師）